

虹

に

「話せる古本屋」の再起

①95 伏木で縁を築いて



「古本なるや」を営む堀田さん

ジャズが静かに流れる。高岡市の伏木港近くにある「古本なるや」。酒屋の倉庫だった建物を改修した古本屋だ。壁沿いの棚に本が並び、店の中央にはテーブルと椅子が置かれている。

テーマは「話せる古本屋」。静かにするのがマナーとされる普通の古本屋と違い、話をしても構わない。相談も受け付けているのが大きな特色。仕事や子育て、ドメスティックバイオレンス(DV)などの相談が寄せられ、店主の堀田 晶 さん(51)が悩みを聴き、一緒に考える。

相談者から感謝されるが、堀田さんは「こちらら『聴かせてくれてありがとう』というフェアな関係性」と言う。「人になかなか言えないことを話してくれるのは、心を開いてくれたということ。これ以上の喜びはないですよ」

ガガガガガ、ガガガガッ。

流れる音楽をかき消すように、近所から機械でコンクリートを砕く音が聞こえる。能登半島地震から1年半。被災した住宅や店舗の取り壊しが進み、更地も目立つ。

店はもともと、JR伏木駅近くで7年前に開業した。地震で被災し、現在の場所に移転したのは昨年4月のことだ。

家々が解体されるのに伴い、店には本がまとめて持ち込まれる。在庫は増えるが、ジャンルにまとまりがなく、品ぞろえに店の個性が出ないのが悩みでもある。

◇

堀田さんは滑川市出身。魚津工業高校を卒業後、地元の機器メーカーに就職し、設計や製造の現場で働いた。

小学校から高校まで吹奏楽に打ち込み、社会人になってからはバンドでテナーサックスを演奏していた。富山市の「クラブマイロ」のこけら落としで演奏し、MONGOL 800など有名バンドの前座を務めたこともある。南砺市で開かれている「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」にも出演した。

2011年、東日本大震災が起きた。東北には音楽仲間がいた。会社の上司に「有給休暇を取って、ボランティアに行きたい」と言うと、「他にやるべきことがあるだろう」とたしなめられた。とても休める雰囲気ではなかった。その頃から、組織で生きる窮屈さを意識するようになった。

高岡市でNPO法人の活動をしている友人の元島 生 さん(42)に悩みを打ち明ける

と、「活動を手伝ってほしい」と誘われた。堀田さんは自分らしく仕事ができると考え、23年間勤めた会社を辞め、NPOに転職。生活に困っている人たちの相談業務を始めた。

相談を受ける中で、「孤立が最大の敵」だと感じるようになった。人とのつながりがなく、独りで悩んでいることで精神や生活が追い詰められていく。社会には支援する制度や団体があるのに、「死にたい」「つらい」と言う人たちがいるのはなぜか。

堀田さんは「個人の活動として、気軽に人とつながれるような場所をつくれなにか」と考えるようになる。その思いと、以前から漠然と古本屋をしたいという気持ちが重なった。

◇

自宅を兼ねた店を開業したのは、18年4



「夏の菜園」 西治子

月。知人に紹介された物件で、理髪店だった建物を改装した。会社員時代に買い集めていた蔵書や近所の人から買い取った本を並べた。屋号は、かつて音楽の練習やライブをしていた拠点の名称「鳴ル家」が由来だ。

「話せる古本屋」は地元住民らに受け入れられていく。高校時代から店に通う女性(25)は「家や学校の人間関係がうまくいかず、八方ふさがりのときに行ける『第三の場所』。私にとって、心のシェルターだった」と話す。

堀田さんは「『話せる古本屋』なんて、一般的には訳が分からないだろうし、自分でもそう思う時がある」と笑う。「でも、誰かの心が動く瞬間があるのなら、それは新しい価値になると思うんです」

店は評判を呼び、県外から訪れる人もいた。国宝となった勝興寺に近く、観光客も

足を運ぶようになった。

◇

昨年1月1日、相談者との面談を終え、店で片付けをしている時だった。経験したことのない大きな揺れを感じた。棚から本が崩れ落ちる。店の前の通りのアスファルトが波打つ。コンクリートの床がメリメリと音を立てて割れる。割れ目からは水があふれ、落ちた本が水浸しになっていく。

堀田さんは、読んでいた老子の本をリュックサックに入れ、片手に愛猫のミミ、片手にサックスを抱えて外に飛び出した。津波警報が発令され、「逃げろ!」「上がれ!」と声が飛び交う。近所のお年寄りと一緒に勝興寺の方に向かった。

しばらくして店に戻ると、建物はゆがみ、斜めになっていた。片付けをしようと店内に入っても、平衡感覚が狂うようで、5分

も中にいられなかった。

とりあえず身軽になろうと考え、商品は全て売ることにした。古書店組合の仲間たちが車で駆け付け、買い取ってくれた。感謝の気持ちとともに、本がなくなった店を見て寂しさがこみ上げた。50歳を目前に生活の基盤を失った。

避難所から仮住まいの一軒家に移り、新たな店を開く場所を探した。出身地の滑川市のほか、富山市や南砺市などの人から「なるやの活動をやってくれないか」と声が掛かったが、堀田さんは伏木地区を離れる気はなかった。「外から来た自分を受け入れ、店を面白がってくれた伏木の人たちには感謝しかないですから」

地震から4カ月後、店は500円ほど海側の場所に移転し、営業を再開。引っ越しは常連客や近所の人たち、NPOの同僚らが

手伝ってくれた。食料やお金を贈ってくれる人もいた。

相談者たちも店を訪れ、「気持ちです」と義援金を手渡してくれた。その人たちの生活に余裕がないことは、相談を受けているのでよく知っている。「自分がやってきたことは、そんなに悪いことでもなかった…」。堀田さんは泣いた。

音楽仲間や会社員時代の同僚からも電話やメールがあった。「声を掛けてもらえるというのは、本当に心強い。やっぱり、人とつながるということは必要だと実体験で感じた」

◇

堀田さんは、もともと古本屋だけで生計を立てていない。平日の午前はリサイクル会社でパート勤務、週2日はNPOで相談の業務に携わる。「何よりも大切なのは、続けることなんです。孤立の問題は向き合い続けるしかない」と言う。「無理をせずに続けるには古本屋に固執せずに、他の仕事をしたらいい」

2カ月前、コントラバスを買った。前から興味を持っていた大型の弦楽器だ。これまで弦楽器を演奏した経験はほとんどないが、「サックスと全然違うのが面白い。いくつになっても、わくわくするのは大切」と笑顔を見せる。

コントラバスは低音で音楽の土台を支える役割を担い、バンドでは後方に構える。「裏方として、どっしりと構えている方が気持ちいい。縁の下の力持ち。それが自分の立ち位置なんだろうと思う」。相談を長年受けてきた自らの人生と重ねる。

「日常の延長に、もうちょっと面白さがあってもいいんじゃないかな。生演奏をバックに本を選んでもらうとか」。新たな発想が湧いてくる。「聞こえてくるのが解体の音ばかりだったら、嫌になるじゃないですか」

夕方になると、工事の音はやみ、一帯は静かになる。堀田さんは本に囲まれたスペースで、コントラバスを構える。はじいた弦の音が鳴る。

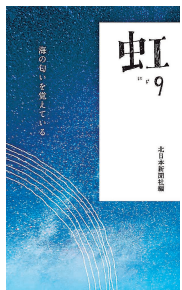
取材中、なるやを訪れた女性がいました。帰省に合わせて顔を出したそうです。移転後に来るのは初めて。前の店が被災したことは知っていたそうですが、「なくなることはないと思っていた」と言います。堀田さんが伏木で店を続ける理由、築いてきた信頼関係が感じられる言葉でした。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911

高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX

0766-25-7773

mail

niji@kitanippon.jp

次回掲載は8月1日(金)です。